

## 西澤静男先生の思い出

二一回生 平田 坦

私は一九四八年（昭和二十三年）六月に神奈川県鎌倉市の小学校から千里第二小学校に転入しました。五年生の時でした。当時の小学校では国語、算数、理科などは全国共通の教科書で授業が行われていましたから転校生でも授業について行くのにさほど困りませんでした。美術の授業では当初たいへん戸惑いました。転校前の小学校では図画の時間は担任の先生がクレヨン画や水彩画を描く指導をしてくださる程度の事でしたが、千二小では専任教諭として着任早々の西澤静男先生がおられ、五年生と六年生の美術の授業を受持つておられました。その内容はそれまで私が受けていた授業の程度をはるかに越える高度なものでした。しかし、授業内容が真に新鮮で幼い生徒たちに絵心と知識欲を奮い立たせる強烈なインパクトがありましたので、戸惑いはやがて消え、未知の世界に吸い込まれる思いで授業を受ける様になりました。そのいくつか思い出すままにご披露させていただきます。

先生は「図画」という言葉を嫌われました。「君達が勉強しているのは『図画』ではなくて『美術』なのだ」と何度も言われたのを覚えています。確かに今から思い起しても小学校五年生を相手にした授業の内容は「図画」の域をはるかに超えていました。授業は二回のうち一回が実際の制作指導、一回は美術史を交えながらの講義でした。当時、小学校では歴史の授業はありませんでしたから、私たちは先ず美術史から歴史の世界に入ったということになります。

エーゲ海のミロス島で発掘されたミロのビーナスの事、イタリアで興ったルネサンスでミケランジェロ、ダビンチ、ラファエロなどと云った天才が輩出し、絵画、建築、彫刻の華が開いた事、またその作品の解説などをしてくださいました。モナ・リザの絵を見せながら「謎めいた微笑をどう見るか？」と生徒に質問をされた先生の茶目っ気のある表情が思い起こされます。十九世紀になってセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンなどの印象派の画家たちが明るい色彩を使って新しい絵画を生み出した事、その裏にはそれまでの写実的な肖像画が当時発明された写真にその主流の座を譲ったことが影響しているというお

話もありました。ピカソやマチスはまだ健在で小学生の私たちも超一流の画家として名前を知っていました。作品については「変な絵だ」という程度の認識でした。先生はピカソの人物画の写真を見せながら人物を立体的に見てそれを平面のキャンパスで表現しているのだとか、マチスは物の形を大胆に省略し鮮やかな色彩で表現する天才だと云う解説をしてくださったのを覚えています。

五年生の三学期が始まったばかりの授業だったと記憶しますが、先生が新聞を片手に暗い面持ちで教室に入って来られました。法隆寺金堂の壁画が火災で焼損するという事件が起こった直後の事です。壁画の模写をしていた画家の電気座布団が漏電した為との報道でした。法隆寺は世界最古の木造建築で日本の大切な文化遺産であること、壁画の焼損は如何に大きな損失であるかをクラスで語られました。終戦後間もない日本では西洋文化礼賛の風潮が漂っていて日本の古い文化を低くみる傾向がありました。が、この授業で日本には世界に誇る文化遺産のある事を私たちは教わったのでした。先生ご自身、西洋画でなく伝統的な日本画をご専門とされていて当時院展に作品を出されていたと記憶しています。

処で、実技の方は当初、水彩画を教えて頂きましたが、六年生の二学期になって新しく木版画の手ほどきを受ける事となりました。紙に下図を書いてそれを木の板に写して彫刻刀を使って彫り、彫り終わった板に絵の具をひき、紙に転写して刷り上げるのですが、新しい創作活動に私たちは夢中になりました。年末にはクラス全員が先生の指導で木版画の年賀状を作成しました。私はこの時以来数年の間、毎年の年賀状は木版画で作るものと決めていました。

私は一九五〇年（昭和二十五年）に卒業したのですが、先生のもとを去りがたく、卒業後四年の間、毎週日曜日の朝、豊津のご自宅で開いておられた絵画教室に通いました。お宅のアトリエに集まった子供たちは毎回十五人程度だったでしょうか。私と同じ様に先生によって美術に惹かれた生徒が多かったのだと思います。千里山会会員の中には、代表幹事の大森信さんを始めその時のメンバーが幾人もおられます。学校での緊張した雰囲気とは異なり、先生を中心に楽しい子供達の絵画サロンが開かれている感じがありました。そう云うわけですから、西澤先生には随分とたくさんのお習作を見て頂きましたが、一度たりとも「上手く描けた」とか「上手になった」

と云う褒め言葉を頂いた記憶はありません。一番の褒め言葉は「努力のあとがある」と云う事でした。そしてその様に褒めて頂くと最高の点数をつけて頂けた気がしたものです。

当時まだ幼かったご子息の瑜伽史さんがガヤガヤと騒いでいる年上の私たちを尻目にアトリエの片隅でいつも静かに絵筆を取っておられました。さほど昔の事ではなかった様な気がするのですが、その瑜伽史さんも既に定年を迎えられ悠々自適の生活に入られていると、最近連絡を取られた奥田陽一さんから伺いました。光陰矢の如し、です。

話を戻しますが、一九五二年（昭和二十七年）頃と記憶します。絵画教室で先生が「創作活動に専念するので千二小を辞めることにした」と私たちに話されました。「それでは後輩達が可哀想ですよ」とすでに生意気盛りになっている何人かで翻意をお願いしたのを覚えています。普段威勢のいい先生がどうした事かその時は黙って寂しそうな顔をされるだけでした。先生の事を思い出す時ふとあの時のご様子が浮かんできます。人知れず心の中で葛藤されていたのではないか、今になってそう云う気がしています。

成人になってからの私は仕事の関係で住まいを転々とした事もあり西澤先生にとうとうお会いする機会はありませんでした。ただ、毎年の年賀状の交換だけは途切れる事なく続いておりますので、私の東京住まいが落ち着くと、上野の国立美術館で開催される展覧会の招待券を贈ってくださる様になりました。処がその展覧会は日本画の院展ではなく、日本版画協会主催の展覧会でした。先生は私たちに版画の指導をされた頃からご自身も版画に傾倒されて行かれた様で、結局は版画家として名を成されたのでした。

瑜伽史様から詳しいご経歴が千里山会に届きこの会報に掲載されると伺いましたので、詳細はそちらに譲る事と致しますが、日本版画協会から得た年譜によりますと、一九六三年（昭和三十八年）に同協会に初入选以降毎年出展され一九六九年（昭和四四年）には会員に推挙されています。日本での展覧会出展はいうまでもありませんが、イタリア、フランス、スイス、中国他世界各地での展覧会に日本の代表的版画家として出品され、多くの美術館で作品が収納されています。日本国内での評価もさる事ながら海外で高い評価を得られた様です。作品の多く

は源氏物語のほか、近松門左衛門、川端康成などの作品に出てくる登場人物をモチーフとし日本画的タッチと感性で創作されていますので、外国の人々は丁度印象派の画家達が広重や北斎の版画に触発された様に先生の作品からジャポニズムを感じ取ったのではないのでしょうか。

日本版画協会展への出品は一九九八年(平成十年)が最後でした。この展覧会への招待券も先生が贈ってください、作品を拝見しました。出品は二点のエッチングで、いずれも文楽人形が画題となっていました。

先生は一九一二年(大正元年)のお生まれとありますから、版画展のご案内を頂いていた頃は既に八十歳を越されていたという事になります。展覧会の作品の力強さ、お手紙の筆致の確かさなどから迂闊にもその様なご高齢を想像もせず、私はいつも壮年期のお姿を脳裏に浮かべておりました。その後、展覧会のご案内が途絶え年賀状も届かなくなり、心配しておりました処、暫く経ってお亡くなりになった事を知りました。長年の間、手紙での交流をさせて頂いておりながら、どうして晩年の先生を豊津にお訪ねしなかったのか、今になって悔まれます。

西澤静雄、一九九七年(平成九年)五月二八日逝去、行年八五歳。日本版画協会の先生に関する年譜の末尾はこの様にただ一行記録されているだけです、私にとつては、そしておそらく先生に師事された多くの方たちにとつても同じでしょうが、この一行の裏にある限らない思い出と哀悼の気持が沸いて参ります。

#### 追記

この原稿を書く傍らインターネットで先生のお名前をキーワードとして検索してみました処、いくつかの作品に出会うことができました。銅版画「文楽心中綱島『おさん』』という作品が先ず眼に入りました。日本画の素養を踏まえたとても美しく且つ優美な銅版画です。

茨木市の広報(平成十六年二月号)サイトに「川端康成ゆかりの書画展」が出ておりますが、そこには伊豆の踊り子に出てくる「駒子」のイメージを彫った銅版画作品がありました。大正モダンの竹久夢二を思わせるほのぼのした作品です。

(なお、この書画展には吹田一中で書道の先生をされ、後年文化勲章を授与された村上三島先生の作品も出されておりました)